# 音楽部会　研究の構想（案）

令和７年度～

## Ⅰ　研　究　主　題

幅広い音楽活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。

## Ⅱ　主題設定の趣旨

令和４年度からの３年間は、「幅広い音楽活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。」を研究主題とし、音楽科で目指す「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指し、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育む授業づくり」「『指導と評価の一体化』のための授業改善」の視点に基づき、研究を進めてきた。

音楽科で目指す資質・能力を育成するためには、「音楽的な見方・考え方」を働かせることが重要である。「音楽的な見方・考え方」とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化等と関連付けること」であると示されている。生徒が音楽を形づくっている要素の知覚・感受を支えとして、自ら音や音楽を捉えていく学習を積み重ねることで、実感を伴った理解、必要性の実感を伴う技能の習得、質の高い思考力、判断力、表現力の育成、人生や社会において学びを生かそうとする意識をもつことにつながる。

音楽科において育成を目指す資質・能力を、生徒が確実に身に付けることのできる題材構成や学習活動の在り方について「主体的・対話的で深い学び」の視点からの一層の授業改善が求められる。これまでの成果を生かし、より深まりのある研究を推進するためにも、本研究主題を継続し、主題解明に向けて研究を進めていきたい。

## Ⅲ　研究のねらいと内容

### １　研究のねらい

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するため、これまでの研究成果や課題を整理し、生徒の実態を踏まえながら、継続的な研究を通して研究主題を解明する。

### ２　研 究 内 容

**⑴　指導計画作成の工夫**

・「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る指導計画の作成
・題材等内容や時間のまとまりを考慮した指導計画の作成
・〔共通事項〕の適切な位置付けと、〔共通事項〕を要とした各領域や分野の関連
・指導のねらいを実現するための適切な教材選択

**⑵　学習指導の工夫**

・「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実
・必要性を実感できる知識や技能の習得を目指した指導の工夫
・音楽科の特質に応じた言語活動の充実
・協働的な音楽活動の充実と学習形態の工夫
・音や音楽と生活や社会との関わりを実感できる指導の工夫
・ＩＣＴを効果的に活用した指導の工夫

**⑶　指導と評価の一体化**

・ねらいを明確にした評価の工夫
・「形成的評価」（指導に生かす評価）と「総括的評価」（記録に残す評価）の使い分け
・自己評価や相互評価等、生徒が自己の学びを実感できる評価の工夫
・ＩＣＴ等を活用した生徒の学習記録の累積

# 音楽部会　令和７年度研究計画（案）

## Ⅰ　研　究　主　題

幅広い音楽活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。
―授業改善のための「指導と評価の一体化」―

## Ⅱ　主題について

現行学習指導要領では、育成を目指す資質・能力が三つの柱（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）に沿って再整理され、どのような資質・能力の育成を目指すのかが明確化されている。これにより、教師が「生徒にどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図る、いわゆる「指導と評価の一体化」が実現されやすくなることが期待されている。

指導と評価の一体化を図るためには、生徒の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくことが大切である。教師は、生徒にどのような力が身に付いたか、学習の成果を的確に捉え、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさ等を見いだしたりできるよう、思考、判断し、表現する一連の過程を大切にした学習の充実を図ることが求められる。

授業においては「形成的評価」（指導に生かす評価）と「総括的評価」（記録に残す評価）を区別し、評価材料を集める場面を焦点化することが課題である。総括的評価においては、毎回の授業で３観点全てを見取らないといけないといった誤解により、評価材料を集めることのみを目的に、評価のための指導に追われるという状況もみられる。さらに、評価の区別がされず、学習評価の全てが総括的評価として行われることにより、評価の結果が学習の改善に結び付きにくいという課題も指摘されている。

そこで、今年度の研究の副題を「授業改善のための『指導と評価の一体化』」とし、教師の力量形成や授業改善に効果的で、生徒の学習の改善に資するよう、学習評価の観点や頻度の在り方、また形成的評価と総括的評価の効果的な在り方を検討していきたい。

## Ⅲ　研究内容とその視点

### １　指導計画作成の工夫

⑴　「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る指導計画・指導案を作成する。
⑵　題材等内容や時間のまとまりを考慮した指導計画を作成する。
⑶　〔共通事項〕は、「Ａ表現」及び「Ｂ鑑賞」の指導と併せて、十分な指導が行われるよう適切に位置付ける。
　・生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を適切に選択する。
⑷　指導のねらいを実現するために適切な教材を選択する。

### ２　学習指導の工夫

⑴　「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実を図る。
⑵　必要性を実感できる知識や技能の習得を目指した指導の工夫を図る。
⑶　音楽科の特質に応じた言語活動を位置付け、音や音楽を介したコミュニケーションの充実を図る。
⑷　知覚・感受したことを、他者と共有したり共感したりする協働的な学習の場面を設定するなど、学習形態を工夫する。
⑸　音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるよう指導を工夫する。
⑹　ねらいを明確にして、ＩＣＴを効果的に活用できるよう指導を工夫する。

### ３　指導と評価の一体化

⑴　ねらいを明確にして各題材や各時間に位置付け、適切な場面、方法で評価を行う。

・「音楽的な見方・考え方」を働かせた授業を積み重ね、対話によって自分の考えを広めたり深めたりする場面を設定する。

・「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して、生徒が思考・判断・表現する場面を効果的に設計した上で、指導、評価をする。

・どのような力を育成したいかというゴールを明確にし、「評価のための評価」ではなく、生徒の学習改善、教師自身の指導改善に資するものとなるようにする。

⑵　「形成的評価」（指導に生かす評価）と「総括的評価」（記録に残す評価）を区別し、効果的に使い分ける。

・生徒の実態や学習状況を把握し、学習指導の在り方の見直しや個に応じた指導の充実を図ることができるよう、ＰＤＣＡサイクルを構築する。

・生徒の学習状況を記録に残す場面を精選し、かつ適切に評価するための評価計画を立てる。

・「形成的評価」とそれに基づく指導を確実かつ丁寧に行い、「総括的評価」を行う場面において、少なくとも「おおむね満足できる」状況（Ｂ）と判断できるように指導する。

・「総括的評価」は、題材等のまとまりの中で、評価場面や評価方法を工夫して、生徒一人一人の学習の過程や成果を適正に評価する。

⑶　自己評価や相互評価等、生徒が自己の学びを実感できる評価を工夫する。

・生徒の特性に応じて、題材等内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫し、学習過程の適切な場面で評価を行う。

・ペーパーテストだけでなく、論述やレポートの作成、発表、グループでの話合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりするなど評価方法を工夫する。

・生徒自身が自分の表現を見直したり成果を実感したりする場面を設けるなど、振り返りの場面を工夫する。

⑷　ＩＣＴ等を活用して生徒の学習記録を累積する。

・ＩＣＴ機器を効果的に活用するなどして、「個別最適な学び」を実現し、「協働的な学び」との一体的な充実を図っていく。

・振り返りをクラウド上に記録するなど、生徒が自分の考えの変容を自覚できるようにするとともに、教師が生徒の考えを把握して次の授業に生かすことができるようにする。

・ワークシートやデジタルワークシートをバランスよく用い、考えの可視化や共有・整理ができるようにして、計画的・継続的に生徒の学びや思考が深まっていく過程を確認することができるようにする。

## Ⅳ　研　究　方　法

１　学習指導要領の趣旨等の理解を深め、研究の継続と累積に努める。

２　各郡市内や郡市間での研究体制を整え、日々の授業実践を基に、協同研究を推進する。

３　教師自身の感性を磨き、指導力及び授業の分析・考察する力の向上を目指して積極的に研修を行う。

⑴　様々な研修会等に積極的に参加し、目指す資質・能力を育成する方法や技能をより一層磨き、指導力を高める。

⑵　授業や評価に関する技能向上のため、充実した学習会や協議会を企画・運営する。

⑶　授業に関する資料を持ち寄ったり、新しい教材の紹介や地域の人材に関する情報交換を行ったりするなど、教師間の連携を密にする。

2025